

『グリム童話』における男性像 —「手なし娘」(KHM 31)の女主人公が会う男性たちをめぐって—

09K001 安藤 百花

はじめに

『グリム童話』は、ドイツ人学者ヤーコプ・グリムと弟のヴィルヘルム・グリムの二人によって収集された童話集である。ここに収められた童話には、「赤ずきん」、「白雪姫」、「ヘンゼルとグレーテル」など、今日では子供向けの有名な語が多くある。

しかし、もとはといえば、性的、暴力的表現が多く含まれている大人向けの物語であった。そのため、手を入れずに出版した初版（1812年）はほとんど売れ残ってしまう。『グリム童話』は原語では『子供と家庭のための童話集』といい、子供の教育のために家庭で読まれることが想定されていたが、その内容が子供にふさわしくないと批判されたのである。第2版（1817年）は、不道德な部分の徹底した削除、キリスト教的価値観を含む表現の追加など、ヴィルヘルムによって手直しを加えられ、大成功を収める。この手直しは、その後、第7版にまでおよび、初版と第7版とは全く違う印象を受ける物語も多い。

このレポートでは、この『グリム童話』から「手なし娘」を取り上げる。この物語は、「シンデレラ」や「白雪姫」と同じように、苦境に陥った女主人公が最終的には王（子）との結婚で幸せになるという物語である。さらに、「手なし娘」は、初版と第2版以降の物語とでは、大きく内容が異なる話の一つでもある。それは、初版はカッセルでマリー・ハッセンプフルークから聞いた話のみで構成されているが、第2版からはツヴェールンのドロテア・フィーマンから聞いた話と合成されているためである。ここでは、まず最初に、なぜ二つの物語が合成されたのかを明らかにする。

「手なし娘」では、女主人公が旅に出ることで話が展開していく。その際、女主人公の前に男性たちが現れている。彼らには同一人物ではないかと推測させるような共通点が見られる。そこで、第2に、この点を検証すると共に、主人公との関係性について論じていく。

まず、初版と第7版の「手なし娘」のあらすじを比較してみよう。

1. あらすじ

(1) 初版

水車と一本の林檎の木以外何も持っていない貧乏な粉ひきがいる。ある時、粉ひきは悪魔に騙され、娘を大金と交換する契約をしてしまう。契約から三年後、悪魔が娘を奪いに三回やってくるが、すべて失敗し娘を奪う権利を失う。この時、娘は父親の粉ひきに両手を切り落とされる。

その翌日、娘は家を出て王の城にたどり着く。城の庭には林檎の木があり、娘は二日間それを食べて飢えをしのぐ。三日目に兵士に見つかり、王に国外追放を言い渡されるが、王子によって城での仕事を与えられる。娘は王子に見初められ結婚する。その後、王が亡くなったため王子は王に、娘は王妃になる。

王が戦争へ行っている間に王妃は男の子を生み、王に知らせるため手紙を書く。しかし手紙は悪魔によってすり替えられ、また王の返事もすり替えられる。そのため、王妃は子供を連れて城を出ていくことになる。王妃は森にたどり着き、そこにいた老人の助言により、大木に腕をからませることで再び両手を

取り戻す。また家を与えられ、王が迎えに来るまでそこに住むことになる。

戦場から帰宅した王は、王妃を探しに出かけ、王妃のいる森にたどり着き、王妃の出した条件を満たすことで再会を果たし、みな城へ帰っていく。

(2) 第7版

粉ひきが悪魔に会い、娘が両手を切られ家を出ていくまでは初版と同じである。

娘は家を出てから梨の木がたくさん生えた王の庭にたどり着く。娘は天使の力を借りて、堀を越えて梨を食べる。次の日、梨の実が足りないことに気づいた王が、娘の存在を知り妃にする。王は妃に銀の手を与える。

一年後、王が戦争へ行っている間に、妃は男の子を生む。王の母が王へ手紙を書くが悪魔によってすり替えられ、また王の返事もすり替えられていたために、妃は命の危機にさらされ城を出ていくことになる。城を出た王妃は森にたどり着き、天使の助けによって家を得る。また、娘の信心深さによって手が生える。七年間、王妃は天使の世話を受けて暮らしていく。

戦争から戻った王は、飲まず食わずのまま妃を探し歩き、七年後に王妃のいる森にたどり着く。王は神の助けによって生きながらえていたのである。再会した王と妃は城へ戻り、再び結婚式を行う。

2. 合成された物語 —キリスト教と近親相姦—

先に述べたとおり、第7版の「手なし娘」は、二人の語り手から聞いた二つの物語が合成されている。初版と第7版の物語を比較し、合成された部分（削除された部分）はどこかを確認してみよう。

初版と第7版を比べると、粉ひきが悪魔と契約する場面から、両手を失った娘が家を出るまでの冒頭部分が共通している。このことから第7版の物語は、冒頭部分を初版のマリー・ハッセンプフルークの物語を残し、後半はドロテア・フィーマンの物語を使ったといえる。では、グリム兄弟が二つの話を合成した理由は何だったのだろうか。

ドロテア・フィーマンが話した「手なし娘」は、初版のものとは比べて「つじつまの合った一貫性」⁽¹⁾をもっていた。そのため、グリム兄弟は初版のものを入れ替えることを決めるが、この物語の冒頭は、娘が「父親に結婚をせまられ、拒んだために両手と両乳房を切り取られてしまい、それで家を出る」⁽²⁾というものだった。

そこで、子供に読ませるのにふさわしくない近親相姦の物語であるドロテア・フィーマンの冒頭は、グリム兄弟によって削除の対象となり、その代わりに、悪魔が登場するマリー・ハッセンプフルークの冒頭を使用したのである。グリム兄弟が物語を修正する際、性的な表現、とくに近親相姦的なモチーフを削除し、悪魔などキリスト教的価値観を用いた表現に置き換えたことが分かる。

3. 男性の登場人物たち

(1) 粉ひきと王

まず、男性の登場人物の中で、最初に登場する男性であり主人公の父である粉ひきと、主人公の義父または夫となる王についてみてみよう。両者には、共通する箇所、似ている箇所がある。ドロテア・フィーマンの「手なし娘」では、娘が家を出る理由、王と出会うまでが近親相姦の物語といえる「千びき皮」と酷似していることから、この二人は同一人物ではないかと推測できる。そこで粉ひきと王の共通点を詳しく見てみよう。

初版において、王は主人公の義父として登場する。ここでの二人の共通点は、林檎の木を一本所有して

いることだけである。しかし、林檎の木が生えている場所にはそれぞれ違いがある。粉ひきが所有する林檎の木は、水車の裏に生えているが、王が所有するものは垣根に囲まれた庭の中に生えている。

次に第七版における、粉ひきと主人公の夫として登場する王とを比べてみよう。粉ひきは初版と同様に水車の裏に林檎の木を一本所有している。しかし王は、堀に囲まれた庭に何本もの梨の木を所有している。この所有している果物に関して共通点はみられないが、生えている場所が水車の裏と堀にかこまれた庭という、どちらも水のそばという似た状況となっている。

果物の木とその場所だけでなく、娘にかける言葉にも共通点がある。両手を切られた娘が家を出ていく場面において、粉ひきは「一生だいじにだいじにしてあげるよ」⁽³⁾ と言い、娘を家に引き留めようとしている。そして王は、庭で果物を食べている娘に対し「おまえを見ずてはしないぞ」⁽⁴⁾ と言い、娘を城に住まわせ結婚する。

まず粉ひきの言葉についてであるが、これはプロポーズの言葉といって差し支えない。また王の言葉に関しても、娘と結婚していることからプロポーズの言葉と受け取ることができる。つまり粉ひきと王は、プロポーズをして娘を引き留めようとしているのである。

このように初版と第七版に見られる、粉ひきと王に関わる共通ないし似通った描写は、二人が同一人物であるとは言えないまでも、そう思わせるのに充分ではないだろうか。また、二人の男性の類似した行動パターンの繰り返しは、グリム兄弟がフィーマンから聞いた話の冒頭をその近親相姦の内容ゆえにハッセンブルークの冒頭と入れ替えたにもかかわらず、第7版においても不道德な父親の行状を暗示させる。

(2) 粉ひきと森で出会う老人

次に、初版に登場する老人と粉ひきについて、共通点を探っていく。

この老人は、深い森の中にある泉のそばにいる。老人は親切で、娘が赤ん坊に母乳を飲ませるのを手伝い、木に腕をからませると両手が生えてくることを教えてくれる。それだけでなく夫が迎えにくるまでの間、住む家を与え、訪ねてきた人間が夫かそうでないかを判断するための方法までも教えてくれる。これらはすべて、一切の条件もなく無償で娘に与えられる。一方、老人は神や精霊の類だという記述はない。

この老人の特徴をあげると、森の中の泉にいる男性、やさしく知識がある、少し離れた場所に一本の太い木が生えている、家を一軒持っているとなる。これらは、主人公の父親である粉ひきを連想させるのに十分であろう。

粉ひきは森の中で悪魔と出会うことから、彼の家は森の中、もしくは森のすぐそばにあったと推測できる。また、粉ひきは家と水車、一本の林檎の木を持っていた。たしかに、泉と（水車のある）川とは一致しないが、水があることでは共通している。太い木が何の木なのかは書かれていないが、読者に二人の同一性を推測させるのに十分な似通った場面設定になっている。

(3) 粉ひき、王、老人—両手の再生と結婚

ここでは、主人公の両手の再生と結婚というテーマで、粉ひき、王、老人の関係について考えてみたい。まず、両手がどのようなモチーフとして使われているのか、初版と第7版を合わせて見ながら、明らかにしていく。というのも、両版には登場人物や小道具に違いがあるものの、ストーリー自体は酷似しているからである。

では、両手を失う意味を考えてみよう。娘が両手を失った理由はそれぞれの冒頭で違った説明がされているが、どちらの場合も両手の再生後、王が娘を探しに出かける場面へと変わっていく。そのため、両手の再生がハッピーエンドにつながるのであり、両手の再生がハッピーエンドの条件だと考えられる。

グリム童話では、苦境に落ちいった女主人公がハッピーエンドを迎えるには、いくつかの条件を充たす必要がある。この条件とは、美人であること、家事能力を身につけること（証明すること）などである。このうちで、両手が再生することで満たされるものは、家事能力を身につけることである。両手がないことは、家事能力の欠如を表していると考えられから、逆の言い方をすれば、両手を失うことは、幸せになることができないことと同義となる。

第7版で、王は娘に銀の両手を与えている。これは本物の両手の代わりであることから、娘に仮の家事能力が与えられたことを意味する。娘は王との結婚の条件を充たしたのである。むろん、この段階では仮のものであるからこそ、完全なエンディングに向けてストーリーは後半へ続いていくともいえる。

初版において、娘の両手を再生させ、ハッピーエンドの条件をみたすことを可能にさせるのは、森の中にいた老人である。この老人の登場までの初版のあらすじを、粉ひき、王、老人が同一人物だと仮定して読み解いていくと、以下のようになる。

粉ひきは娘から結婚の条件を奪う。娘は家を出ていくが、結局は家（城）に帰ってくる。粉ひき（王）は、一度出て行ったのだからと娘を追い出そうとするが、息子（王子）に止められる。その後、息子（王子）と娘の結婚を渋々認め、死ぬ。娘が家（城）を再び出た時、森の中で粉ひき（老人）と再会する。ここで、ようやく粉ひき（老人）は息子と娘の結婚を認め、娘に結婚するために必要な条件を返す。また、息子が辛抱強く娘を待てるかを試す条件を与え、息子が迎えに来るまでの間、娘を保護していた。

森の中で粉ひきと再会する場面だが、王はこの時死んでいるので、森の中というのは他界の可能性がある。また、結婚の条件として親の許可がかかわってくるとも考えられる。

次に、ドロテア・フィーマンの「手なし娘」の冒頭では、父親との結婚を拒んだために両乳房と両手を失っていることについて考えていく。先に述べた通り、両手の有無が結婚とかかわってくることから、娘が自分以外の男性と結婚することができないようにするために、両手を切り落としたといえる。さらに、両乳房を切り落としたことについては、娘から母親になる資格を奪ったと考えられる。娘は子供に母乳を与えることができなくなるからである。

しかし、娘は王のもとで子供をもうけている。これは初版において、娘が王の庭で林檎を食べたことと関わっている。グリム童話において、林檎は豊穡や多産の象徴として登場する。つまり、林檎を食べたということは、娘が成熟して母親になれる段階に達したと解釈できよう。

このことについても、粉ひきと王が同一人物と仮定して第7版を読み解いてみる。

粉ひきは娘が自分との結婚を拒んだために、結婚する条件（すなわち、同時に母親となる条件）を奪う。娘は家を出て行くが、このままでは生活していけないと悟り家（城）に戻る。娘は粉ひき（王）との結婚を、これからの生活のために受け入れる。その後、娘が再び家（城）を出ていくことになる。粉ひき（王）は七年間探し歩き、娘への愛情が本物であることを証明する。娘がそれを理解し、二人は真の夫婦となる。

第7版では王の庭に生えている木は、林檎ではなく梨ということになっている。この梨についてであるが、ドイツで林檎と並び一般的な果物であることから、粉ひきと王のつながりを隠すためグリム兄弟が修正した可能性がある。

(4) 粉ひきと悪魔

ドロテア・フィーマンの話の冒頭は明らかに近親相姦の内容を含んでいた。それでは、初版の冒頭には近親相姦のモチーフが含まれていないのだろうか。初版の冒頭において、悪魔は娘を三回、家から連れ出しに来る。ここではまず、悪魔の目的が何だったのかについて考えていく。

この悪魔が三回やってくる場面は、初版後半の王の行動と共通している。この王の行動とは、城を出た娘を探して森に入ったとき、娘がいる家を見つけ、中へ入れるように三回頼む場面である。このときの王は、娘を城へ連れ戻しに来ている。第7版では城へ戻って、再び結婚式を挙げているので、娘との結婚を目的としていると言っていいだろう。このことから、悪魔も娘との結婚を目的に家を訪ねていると類推できる。

悪魔と王の場面での大きな相違点は、娘が泣いているか否か、娘の両手の有無（子供の有無）である。悪魔の場合では娘は泣いて嫌がっているが、王の場合では泣いている様子はみられない。すなわち、悪魔との結婚が娘にとって不本意である一方、王との結婚は、娘の本意だからである。

両手の有無（子供の有無）についてはどうだろうか。悪魔の場面で娘は両手を失い、王の場面では子供と共に暮らしている。これまでに見てきたように、両手には幸せな結婚に結びつく条件として家事能力を身につけられるかどうかの意味が加えられていた。しかし、それ以外の意味を読み取ることはできるだろうか。この点については、悪魔の命令で粉ひきが娘の両手を切り取る場面での娘と粉ひきとの会話が解釈の糸口を与えてくれる。

娘が清らかなために触れることのできない悪魔に代わり、父親の粉ひきが娘の両手を切ることになる。このとき、粉ひきが娘に手を切ることを許してほしいと頼む。娘の返答は、父親の好きにしてもいいというものだった。この含みのある会話は、両手の切断が処女性の消失と関係していることを推量させる。そして、悪魔の命令とされているものの、実際に娘の両手を切り落としているのは父親の粉ひきであり、粉ひきに悪魔のような男性像を読み取ることができよう。

おわりに

これまで、粉ひき、悪魔、王、老人の共通性と同一人物とみなせるかどうかを考えてきた。これは、「手なし娘」に登場する男性たちが、1人の男性のそれぞれ違う性質を表しているのではないかと推測したからである。これは授業で「手なし娘」を扱った際、悪魔の存在が粉ひきのもつ娘に対する下心を表しているのではないかという意見に関心をもってから考え続けていた。

初版に登場する主人公の娘とかかわる男性登場人物は、粉ひき、悪魔、王、王子、老人の五人である。このうち、粉ひきと同一人物と考えられるのは、悪魔、王、老人である。それぞれが娘とどのような関係をもっていたのかを見ていくと、粉ひき（悪魔）は性関係を強要する悪い男性。王は、第7版においては夫であり、初版においては最初は義父であるが、夫となった王子がその義父の死後、王となっているので、やはり夫像とつながる。老人は娘を夫が現れるまで保護する父親的存在といえる。

また彼らが同一人物であるとするならば、「手なし娘」は主人公の娘の、一番近い男性である父の粉ひきに見た、男の姿（悪魔）、夫の姿（両版の王）、父の姿（老人）を描いた物語といえよう。

註

- (1) マリア・タタール『グリム童話 その隠されたメッセージ』新曜社、1990年、39頁。
- (2) 同上、39頁。
- (3) 金田鬼一訳『完訳 グリム童話集 (一)』岩波書店、1979年、309頁。
- (4) 同上、p.312。

参考文献

- 吉原高志・吉原素子『初版 グリム童話』1、白水社、1997年
金田鬼一『完訳 グリム童話集 (一)』岩波書店、1979年
高木昌史『グリム童話を読む辞典』三交社、2002年
小池辰雄 他『グリム童話研究』日本児童文学会、1989年
ライナー・テッツナー『ゲルマン神話 上下 神々の時代』青土社、1998年
H・R・エリス・デイヴィッドソン『北欧神話』青土社、1992年
フェリックス・ギラン『ギリシア神話 (新装版)』青土社、1991年
早坂優子『ヴィーナスの片思い～神話の名シーン～』視覚デザイン研究所、1995年
草野巧『図解 悪魔学』新紀元社、2010年
市川又彦『全訳 イソップ物語』南雲堂、1976年
ウィリアム・クレイギー『トロルの森の物語』東洋書林、2004年
共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1978年、1988年
マリア・タタール『グリム童話 その隠されたメッセージ』新曜社、1990年

(担当教員 桑原ヒサ子)